

明治・大正、昭和初期の波止場文化と宣伝チラシの研究

【代表者】

菅原真弓 大阪市立大学 文学研究科 教授

【共同研究者】

小池志保子 大阪市立大学 生活科学研究科 准教授

木川剛志 和歌山大学 観光学部 准教授

村田隆志 大阪国際大学 国際教養学部 准教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

港は、外国文化に触れる最前線であると同時に、外国人が居留する最前線でもある。相互の文化が交流し、いわゆる異国情緒溢れる空間が生まれる場所でもある。本研究は、船舶が海外との交流の主要な経路であった時代、明治・大正、昭和初期の波止場を中心として形成された大衆文化（本研究では波止場文化と呼ぶ）を研究し、当時の都市交流のダイナミズムを検証したい。

この検証のために、本研究では多角的視点によって、波止場文化を研究する。一つに港町で発行された印刷物、主に旅行者を対象とした宣伝チラシを収集し、その分析を行う。今回の研究期間では、大阪港、神戸港、敦賀港、基隆港を主な事例として扱う。一方、大阪の波止場文化の担い手として都市への移住民の受け入れ先となった長屋の研究をこれに加える。長屋に関してはその建設当時の都市のダイナミズムに加えて、現代になりリノベーションの対象となっており、積層された歴史性がどのように現代に受け入れられているかも研究対象とする。現在、インバウンド旅行者のために民泊施設としてリノベーションされている事例も多い。当初の都市流入民の長屋が今、改めて国外からの旅行者の受け入れ場所となる、この物語についても研究する。

本研究では研究の取りまとめ及び印刷文化に関する検討、研究を菅原が、大阪の長屋建築とその推移現状を小池が担当、観光学の視点から和歌山大学の木川が分析する。またこのような多角的な視点から、波止場文化を分析し、戦争で断絶された戦前の頃の国際化の潮流と、当時の流れが現代にどのように生きているかを検証する。研究成果の公表方法として展覧会での公開を考えている（宣伝チラシとその研究成果、長屋建築の当初と現状、波止場の今を伝える動画を展示予定）。展示企画のキュレーションを、主に村田が担当する。

【研究成果（報告書より抜粋）】

共同研究メンバーでの研究会（打ち合わせを含む）を二度実施（11月、2月）し、それぞれの研究計画および進捗状況についての話し合いを持った。

- ① 小池：都市への移住民の受け入れ先であった大阪長屋は、現在、老朽化が課題となっている。その大阪長屋を通じた都市での宿泊の可能性を堺市堺区および大阪市住之江区で検討した。既存の町家・長屋を利用したゲストハウスを調査したところ、地域に宿泊客を牽引するには課題があるが、交通利便性により宿泊を選択した利用者に、地域特有のローカルな体験を提供しようとする傾向がみられた。この傾向をさらに引き出す町家・長屋のリノベーションを図面化した。
- ② 木川：国内においては和歌山県において大阪商船がかつて牽引していた紀州航路の調査を行なった。大阪と愛知を結ぶ紀州航路は、当初はこの二地点の間の交通という目的のみであったが、時代が進むに連れ沿線の観光地の開発をともなったものとなった。その象徴的な場所が文里港であった。この港についての文献調査を行なった。
- ③ 村田：「波止場文化」という問題意識のもとに、国内、及び国外の地域的特性を読み解こうとする本プロジェクトを展覧会として結実させる前段階として、先行事例を検討、国内において、博物館学の蓄積を確認した。
- ④ 菅原：都市大阪への移住民の玄関口であった旧川口居留地の現地調査および文献調査を行った。また加えて、大阪を取り上げた鉄道や船舶航路の記事や雑誌、パンフレット等の資料調査を実施した。

継続して申請を予定する次年度に向けての話し合いを持ち、それぞれの専門性や視点を生かした共同研究とする旨、改めて了解し合った。